



©Moto Yoshimura



©Moto Yoshimura

最前線への回帰

SHINGO KUNIEDA  
国枝慎吾

国枝慎吾にとって、リオパラリンピックが開催された2016年は、敗北のシーズンだった。1月の全豪オープンで、国枝はイギリスの選手に1回戦負けを喫した。右肘が悪化をあげ4月に手術を受ける。9月に行われたリオパラリンピックでは、ダブルスでは銅メダルを獲得したものの、シングルスは準々決勝で敗退した。

国枝のキャリアは輝かしい。2004年アテネパラリンピックのダブルスで金メダルを獲得し、05年に初めて世界ランキング1位に。08年北京、12年ロンドンパラリンピックでのシングルス2連覇、09年から車いすテニスのグラン

ドスラムが一般の大会と同じ場所・時期で開催されるようになり、国枝はシングルスで26勝、年間グランドスラム5回という、驚異的な数字を叩き出している。

車いすテニスでは、バックハンドのトップスピンは不可能だと言われていた。それをひっくり返したのが国枝だ。世界のライバルたちは、国枝の背中を必死に追いかけて、その過程で、一般のテニスのセオリーを取り入れるようになった。国枝のように、不可能を可能にすべく、そうしてイギリスの選手たちは、車いすに座った状態で高い位置から鋭い弾道のバックハンドを身につけた。2016年に国

枝が敗北した背景には、右肘の故障だけでなく、世界の車いすテニスの進化があったのだ。

リオパラリンピック後、半年間の休養を経て復帰した。

「2017年は、正直なところ、世界の潮流をどう追いかけるかがテーマだった。最初は、真似から入って、そこからオリジナルへと昇華させていく。技術の先回りをすることで、勝利を生んでいくのだと思う」

との言葉通り、イギリスの選手たちのプレーを真似るところからリスタートし、己のプレーを確立させる。国枝が、新たなバックハンドを身につけて、グランドスラ

ムの舞台に戻ってきた。進化が、再び国枝を軸に回り始めた。

2019年は、新しい風が吹いた。9月30日～10月6日に開催された楽天オープンに車いすテニスの部が初めて設けられ、国枝は単複の初代チャンピオンとなった。この大会に出場していたノバク・ジョコビッチは、過去に車いすに乗って国枝とテニスをした経験がある。「車いすテニスの選手たちは、真のヒーロー。彼らは自分たちの障害をアドバンテージに変えてプレーし、我々に勇気を与えているのだから」（ジョコビッチ）

グランドスラムだけでなくATPツアーでも車いすテニスが

同時開催されることは、国枝の長年の夢だった。それが一つ、実現した。

また、10月14日には国枝がアンバサダーを務めるユニクロのチャリティイベントが東京・有明コロシアムで開催。イベントマッチとして国枝とロジャー・フェデラーがペアとなってダブルスが行われ、観場のスタンドを魅了した。

「2003年のウインブルドンで優勝した姿を見たときから、僕はフェデラー選手の大ファンだった。その憧れの選手とダブルスを組めたなんて夢のよう。控室に戻ってから、これで引退してもいい、と思うくらい感動だった」と、

国枝が手放して喜んでいて、感動は国枝だけのものではない。「国枝とプレーできたのも、ユニクロのイベントだからこそ、私にとっても素晴らしい体験だったが、それはそのまま観客にとっても同じように素晴らしい体験だった。そしてこの経験が、2020年東京五輪・パラリンピックに繋がっていきはずだ」

と、フェデラーが語った。

東京五輪・パラリンピックの舞台上、スイス代表としてフェデラーが、日本代表として国枝が立つ。2020年、興奮の夏が、まもなく幕を開ける。

文/宮崎理恵